



どこかで出会った気がする。

その仕草、表情：知るはずもないのに懐かしい気がする。

何処だったろ…？

思い出そうとすればするほど

手がかりの糸口はひっこんでしまう…。

若い頃だっただろうか？

幼い頃だったろうか？

もうあきらめようと思うが視線を外せない…



駅に着きその人は降りてゆく…

人混みにまぎれる後ろ姿を目で追いながら

またひとつどこかの分岐点が変わろうとするのを感じた…。

これが私の椅子

私が生まれた時に与えられた椅子

まだ足が届かない頃

何度か落ちたりしたっけ…？

ここにクレヨンで書いた跡が…

ここにナイフで削った跡が…

何度も表皮を張り替えて今もここに…。



私も父さんも爺ちゃんもそうしてきた様に

子供たち、孫たちにも伝えて欲しい…

「ほら、これがお前の椅子だよ」 って…

□

「これは夢だ…」

そう思える夢がある。

ここにいるハズのない懐かしい人に会ってる。

いっぱい話したい事があった筈なのに

ただ笑って見つめている…

「何年も経って

こんな風に会えてよかったね」

頷きながら少し視線を外した間にその人は消えた…。

「やっぱり夢だ…」

そう分かる夢がある。

今もどこかで元気にいるのだろうか…？



例えば

三十年くらい経った頃…

どんな話をしているのだろう…？

職場での人間関係？

兄妹たちの事？

これからの事…？

どんな顔をして

何について語り合うのだろう…？

あいかわらず彼女は不機嫌で

僕は夢を追っているのだろうか？

そもそも

その時まで一緒にいられないかもしれない…

それでも

一緒にいられば…

きつと…



今はいつで、自分は何歳で、ここは何処か？

目が覚めた時、時折分からなくなる時がある。

さっきまで別の世界に居た気がしている

単なる夢だったのだろうか？

でも

さっきまで浴びていた日射しの感覚…

触れていた人の温もりが

今も残っている…

真実なのか？

映画のようにそれを突き止める為に孤軍奮闘するワケでもなく

誰かがネタをバラしてくれるワケでもない…

夢だろうが現実だろうがまた一日がはじまるコトに変わりはなく、

朝のニュースを見ながら珈琲を流し込んでいる自分がいる。

今朝の会議の資料は…どーしたっけ？



前夜かもしれない

こんな事になるならやっておけばよかった…と

明日は思ったりするのだろうか？

伝えそこねてた話

描きたかった作品

書けなかった手紙

そしてこれからの事…

ひよっとしたらムダになってしまったかもしれない

でもやらなかった事を後悔するのかもしれない…



今が前夜と分かっていたら…